

研究報告

看護師養成所2年課程（定時制）の学生の 人体解剖見学による死生観とターミナルケア態度の変化

Changes in the death attitude and attitude toward care
of dying among nursing students with an associate nurse license through
a human anatomy tour

有田 弥棋子^{1) 2)}, 加藤 真由美³⁾, 橋口 雅未⁴⁾

Mikiko Arita^{1) 2)}, Mayumi Kato³⁾, Masami Hashiguchi⁴⁾

¹⁾大阪信愛学院短期大学, ²⁾金沢大学医薬保健学総合研究科保健学専攻博士後期課程

³⁾金沢大学医薬保健研究域保健学系, ⁴⁾阪南市立児童発達支援センターたんぽぽ園

¹⁾ Osaka Shin-Ai Collage,

²⁾ Doctoral course, Division of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Kanazawa University

³⁾ Faculty of Health Sciences, Institute of Medical, Pharmaceutical and Health Sciences,
Kanazawa University

⁴⁾ Hannan Municipal Child Development Support Center Tanpopoen

キーワード

准看護師, 看護学生, 死生観, ターミナルケア態度, 人体の解剖

Key words

associate nurse, nursing student, death attitude, attitude toward care of dying, human anatomy

要 旨

本研究は看護師養成所2年課程（定時制）の学生を対象に、人体の解剖見学が臨老式死生観尺度とFrommeltターミナルケア態度尺度日本語版において変化をもたらすかを検証した。見学群（n=31）は解剖見学と終末期看護学の受講、非見学群（n=31）は終末期看護学の受講のみで、前後に無記名質問紙調査を実施した。結果、両尺度の群間に差はなかった。看取り体験のない見学群は第5因子「人生における目的意識」（ $p<0.05$ ）が向上した。看取り体験のある非見学群においては第2因子「死への恐怖・不安」（ $p<0.05$ ）は低下し、第5因子「人生における目的意識」（ $p<0.05$ ）、および「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」

連絡先：有田 弥棋子

大阪信愛学院短期大学 看護学科

〒538-0053 大阪府大阪市鶴見区鶴見6丁目2番28号

($p<0.05$)と「Ⅱ. 患者・家族を中心とするケアの認識」($p<0.05$)に向上がみられた。看取り体験が結果に影響したと示唆され、検証のあり方や教育の方略について検討する必要性が明らかとなった。

はじめに

日本の65歳以上の人口は増加傾向が続いており、2042年には3,935万人へとピークに達すると推定されている¹⁾。多死社会の状況において、看護師は最期まで患者の尊厳を保ち、その人らしさを支援するためのニーズを的確に査定し、支援する役割がある。すなわち、ターミナル期において心身の苦痛や不安の緩和を図る支援だけではなく、「患者の人生の脈絡における集大成としての別れの時をどのようにサポートするのか、最期の瞬間までその人らしく生きることを支える」²⁾全人的ケアの実践が求められている。

看護師は、その実践力を備える基盤として自身の死生観を形成している必要がある。死生観は、「死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む」³⁾概念であり、死に対してだけではなく、生きるためのその人の行動を決定する基盤として働く⁴⁾とされている。看護師自身が揺るぎない死生観を備えていなければ死に対して恐怖心を抱き、その恐怖心のために患者とのコミュニケーションを逃避したり⁵⁾、患者に寄り添うことに辛さや、患者に向き合うことを避けたい感情や恐怖心をもつこと⁶⁾が報告されている。看護学生においては、自身の死について身近な相手に語りたい思いがある一方で、語る時に恐怖、不安、寂しさなどの否定的感情をもっていること⁷⁾が報告されている。死生観を形成していれば死に対する不安や恐怖心が低減し、ターミナル期の患者に関わる看護師としての態度（以下、ターミナルケア態度）の積極性に影響する⁸⁾ため、看護基礎教育の課程から死生観の形成を進める教育を行う必要がある。

死生観形成を進める看護基礎教育は、終末期看護学、がん看護学、緩和ケア学の講義などの知識型プログラムに加え、生命や医療職としての倫理教育の機会⁹⁾が必要となるため、読書や映画鑑賞¹⁰⁾、シミュレーション教育¹¹⁾、ロールプレイ¹²⁾を用いた演習、そして臨地実習でターミナル期の患者を受け持つこと等を通して学ぶ実感型プログラムが行われている。その中で、人体の解剖見学（以下、解剖見学）や死の疑似体験などの実感型のプログラム¹³⁾を看護基礎教育に導入している看護系大学や看護師養成所がある。看護学生の解剖見学の目

的には、ご遺体を前に人体の構造や機能を学ぶことに加え、献体をすることへの思いに気付き、献体をされた方々の尊厳を学ぶなどがある¹⁴⁻¹⁶⁾。教育効果では、「人体の機能と構造の理解につながる」¹⁷⁾ことや、看護学生としての学習動機¹⁸⁾、さらに学習意欲や看護師になる決意をもつといった内面的な成長に影響¹⁹⁾すると報告されている。

解剖見学の教育方略は適切であるのか検討が十分ではなく、検証が課題となっている¹³⁾。アイルランドにおいて、解剖見学を取り入れている看護師養成所は増加傾向にあるが、どのような教育効果や影響を与えるかの検証は進んでいない。その中で、献体による学習群は、プラスチック製の人体模型を使用した群と比べて、43%の看護学生が患者の死に向き合う準備ができるようになったと報告されている²⁰⁾。また、台湾においても見学群は「死への不安」を有しながらも、Chinese version of College Students' Course Engagement Questionnaire等の客観的指標において「ケア態度形成」等に関する教育目標が達成された²¹⁾と報告されている。解剖見学は看護学生の死生観やターミナルケア態度の形成に寄与すると考えられる。しかし、それらの研究成果の対象者は看護大学の学生であり、看護師養成所2年課程の看護学生はどのような結果を示すのか明らかになっていない。

准看護師養成課程のカリキュラムに、終末期看護学や緩和ケア学の科目が設けられていない²²⁾ため、看護師養成所2年課程における教育では死生観形成は重要である。死に関する教育について、看護師および准看護師養成所1260校の看護教員を対象にした調査²³⁾において養成課程別で結果は示されていなかったが、死後の処置に関する教育を行っているとは回答したのは75.2%の養成所であった。その教育内容において90%以上の養成所が提供していたのは「敬虔な気持ち・態度」「死後の身体的変化（死後硬直・生体反応の消失）」「家族への配慮」「外観の整容」「死の定義」「死者の尊厳を守る」「エンゼルメイク」等が示されていたが、教育評価は提示されていなかった。看護師養成所2年課程（定時制）の看護学生のみを対象とした研究では、解剖見学の教育効果を感想内容（自由記載）の類似性に基づき質的にまとめた提示²⁴⁾にとどまっており、解剖見学による死生観とターミ

ナルケア態度の形成に関する教育効果を尺度を用いて客観的に追跡して検証した先行研究は見当たらなかった。

研究の目的

本研究の目的は、看護師養成所2年課程（定時制）の学生を対象に、解剖見学が死生観とターミナルケア態度に変化をもたらすかを尺度を用いて対照群を設けた検証により明らかにすることである。

用語の操作的定義

1. 解剖見学：「献体」した人の体に触れ、臓器や人体の構造を観察し、生命の尊さを知り看護に役立てるための学びとする。

2. 死生観：死と生に対する見方、死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む³⁾ことを参考に、死と生に対する見方、死と生にまつわる価値や目的等に関する考え方とした。

3. ターミナルケアの態度：死にゆく患者を前に、看護実践に向けられる行動・信念・感情についての認識²⁵⁾とした。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、対照群を設けた観察研究である。解剖見学を行っている看護師養成所2年課程（定時制）の学生（以下、看護学生）を見学群とし、見学を行っていない方を非見学群とし、死生観とターミナルケア態度の尺度得点の推移を比較した。

2. 対象者

研究協力施設は、関西地区にある看護師養成所2年課程（定時制）（以下、2年課程）であり、終末期看護学の授業をほぼ同時期に、かつ同一講師により同じ内容の講義を展開しており、1校は解剖見学を実施し、もう1校は見学をしていない計2校を便宜的に選定した。対象者は本研究に同意した計79人の1年生であり、うち見学群は39人、非見学群は40人とした。除外基準は本研究に同意をしない人とした。

3. 教育の内容・方法

1) 解剖見学

解剖見学の目的は、人体の構造に関する知識を習得すること、献体された方々の生前の思いを鑑みて、看護師としての倫理観や生命への責任を感じとることであった。解剖見学前に、正常解剖の

見学目的と献体の歴史、献体登録の現状、解剖の種類と献体、遺骨返還の時期と方法、生命倫理について説明してから人体が解剖された状態の見学を進めた。はじめに献体者が自身の体を提供し、医療職に学んで欲しいという生前の意思に敬意もって献体に黙祷を行った。その後に医学への貢献のために「無条件」「無報酬」で遺体を提供する仕組みについて、さらに臓器に触れながら人体の構造や機能等について説明を行った。解剖見学後は日を変えて、献体者の意思や篤志に感謝し、看護職としての責任を果たすこと等について、グループ内で学びを共有する時間を設けた。

2) 終末期看護学

研究結果が影響を受けることを鑑み、両校のシラバスを教務部長から許可を得て閲覧した。両校共に解剖見学前に開講されている死生観・ターミナルケア態度に関係する科目は、1年次の「成人看護学（2単位）」と「老年看護学（2単位）」であった。それぞれに含まれている終末期看護の講義（90分/回、各3回）であった。講義内容はターミナル期にある患者の看護として緩和ケア、エンドオブ・ライフケア等についてであり、講師は同等の資料に沿った講義内容を両校に行った。両群ともに講義内で「おくりびと」（松竹株式会社、日本）の映画の一部（納棺師見習いの主人公が熟練の納棺師に連れられて初めて納棺の儀を目にした場面、銭湯で顔なじみになった高齢女性を主人公が納棺の儀を執り行う場面）を上映した。「おくりびと」の上映の目的は、納棺師による死の儀式を通して、故人との別れを成立させる場面から、看護師として遺体へのケアならびに尊厳を理解することであった。なお、全編の鑑賞を希望する学生は授業時間外でDVDを購入する等により視聴した。

4. データ収集方法

データは自記式調査票を用い収集した。調査票は無記名としたが、追跡するため学籍番号を記入してもらった。配布・回収方法は、同時に同じ内容の調査票を2回配布し、両回とも留め置き法により回収した。回収では各校の教室の一角に鍵のかかった回収箱を1回目は解剖見学および終末期看護学の授業前の7日間設置し、2回目は終末期看護学の受講後に3日間（月－水曜日の通学期間）設置し、調査票を投函してもらった。なお、見学群は解剖見学を終えた後に終末期看護学を受講している。研究期間は2017年12月上旬－2018年2月中旬であり、うち見学群の観察期間は12月上

旬－1月中旬、非見学群は1月下旬－2月中旬であった。

5. 調査内容

調査内容は基本属性、死生観、ターミナルケア態度についてである。基本属性は性別、学歴、職歴、看取り体験の有無、死別体験の有無、死別体験の関係性（複数回答）である。死生観は臨老式死生観尺度²⁶⁾を用いて測定した。この尺度は7つの因子から構成されており、「死後の世界観」4項目、「死への恐怖・不安」4項目、「解放としての死」4項目、「死からの回避」4項目、「人生における目的意識」4項目、「死への関心」4項目、「寿命観」3項目で構成されている。回答は「当てはまらない（1点）」－「当てはまる（7点）」の7件法となっている。信頼性と妥当性は確認されており、各因子のCronbach's α 係数は0.74－0.88である²⁶⁾。ターミナルケア態度はFrommeltのターミナルケア態度尺度日本語版（FATCOD-FormB-J：Frommelt attitudes toward care of the dying scale-FormB-J）²⁷⁾²⁸⁾を用いた。この尺度は3つの概念から構成されており、「死にゆく患者へのケアの前向きさ」16項目、「患者・家族を中心とするケアの認識」13項目、「死の考え方」1項目で構成されている。回答は「全くそうは思わない（1点）」－「非常にそう思う（5点）」の5件法となっている。信頼性と妥当性は確認されており、各因子のCronbach's α 係数は0.65－0.85である²⁸⁾。なお、両方の尺度とも使用権の許諾は不要となっている。

6. データ分析方法

基本属性はPearsonの χ^2 検定、Fisher's正確確率検定を用いて両群の同質性を確認した。各尺度の因子合計得点の変化はShapiro-Wilk検定により正規性を確認し、死生観についてはAnalysis of varianceで分析した。ターミナルケア態度尺度は正規性を示さなかったため、見学群と非見学群の群間比較はMann-WhitneyのU検定で分析し、前後の比較はWilcoxonの符号付順位検定で分析した。各尺度について $p < 0.05$ を有意水準とした。なお、臨老式死生観尺度とFATCOD-FormB-Jは、全項目の合計点を評価に用いることを薦められていないため算出していない。分析はIBM®SPSS® Statistics26（日本IBM株式会社、東京）を用い、統計解析を専門としている研究者から助言を受けて行った。

7. 倫理的配慮

本研究は、梅花女子大学研究倫理審査委員会の

承認を受けて実施した（No.2017-0035）。説明内容は研究の趣旨や方法、倫理的配慮、学術誌等への研究成果の公表等についてであり、書面を用いて口頭で説明し、教務部長においては同意書の署名により、対象者においては調査票の投函をもって研究協力の意思とみなした。データは本研究以外に使用せず、漏洩や盗難が起らないよう厳重に管理し、一定期間の保管の後に完全に廃棄すること等について説明した。研究協力は任意であり、協力をしなくても一切不利益を与えず、個人情報保護し、協力の有無・調査票への回答内容の如何に係わらず一切成績に影響しないように倫理上の配慮を行った。なお、研究協力校に所属していない研究者が、授業時間以外で強制力をかけることなく、研究協力について書面を用いて口頭で依頼と説明を行い、調査票を配布・回収した。学籍番号により対象者が特定されることを防止するために、新たに関係のないID番号を付した。学籍番号の部分は、はさみで切り落とし、それをシュレッダーにかけて完全に処理し、その後に研究者間でデータを共有した。

結 果

調査票の回収数は68部、回収率は86.1%であった。無回答の多い調査票6部を除外したところ、分析対象者数は62人（78.5%）であり、うち見学群は31人（79.5%）、非見学群は31人（77.5%）であった。

1. 対象者の概要（表1）

年齢の平均値±標準偏差は見学群が27.0±7.4歳、非見学群は27.3±5.1歳であり差はみられず、すべてが女性であった。准看護師としての経験年数は両群に有意差がみられ、最も多い分布は、見学群では1年未満が25人（83.3%）、非見学群は1年以上3年未満が27人（87.1%）であった。看取り体験では有意差がみられ、体験ありの者は見学群が15人（48.4%）、非見学群は25人（86.7%）であった。死別体験には有意差がみられなかった。

2. 死生観への影響（表2）

見学群・非見学群の臨老式死生観尺度での得点の比較では、交互作用および群間の主効果に有意差はみられなかった。しかし、前後の主効果は、第2因子「死への恐怖・不安」（ $F=9.48$, $p=0.003$ ）、第5因子「人生における目的意識」（ $F=5.29$, $p=0.025$ ）、第7因子「寿命観」（ $F=4.14$, $p=0.046$ ）にみられた。各因子の平均値±標準偏差は第1因子「死後の世界観」20.3±5.6点、第2因子「死へ

表1 対象者の基本属性

項目	内容	全体 N=62	見学群 n=31	非見学群 n=31	p値	
年齢	平均値 (SD)				0.837 ^a	
		27.1 (6.3)	27.0 (7.4)	27.3 (5.1)		
性別	人 (%)					
	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)		
	女性	62 (100.0)	31 (100.0)	31 (100.0)		
職歴	准看護師歴					
	1年未満	28 (45.9)	25 (83.3)	3 (9.7)		
	1年以上3年未満	31 (50.8)	4 (13.3)	27 (87.1)	<0.001 ^b	
	3年以上	2 (3.3)	1 (3.3)	1 (3.2)		
看護補助者の経験	有	14 (22.6)	9 (29.0)	5 (16.1)	0.181 ^c	
	無	48 (77.4)	22 (71.0)	26 (83.9)		
	有	40 (64.5)	15 (48.4)	25 (80.6)	<0.008 ^c	
	無	22 (35.5)	16 (51.6)	6 (19.4)		
死別体験	有	56 (91.8)	30 (96.8)	26 (86.7)	0.167 ^c	
	無	5 (8.2)	1 (3.2)	4 (13.3)		
死別体験の 関係性 (複数回答)	二親等以下	有	45 (73.8)	26 (83.9)	19 (63.3)	0.860 ^c
		無	16 (26.2)	5 (16.1)	11 (36.7)	
	三親等以上	有	36 (59.0)	18 (58.1)	18 (60.0)	1.000 ^c
		無	25 (41.0)	13 (41.9)	12 (40.0)	

SD：標準偏差。a：t検定 b：Pearson χ^2 test c：Fisher's exact test

欠損値 見学群：准看護師歴1，非見学群：死別体験の有無1

二親等以下：父母、祖父母、配偶者など 三親等以上：親戚、友達、ペットなど
構成比は小数点以下第2位を四捨五入した値である。

の恐怖・不安」18.2±6.8点、第3因子「解放としての死」16.3±6.0点、第4因子「死からの回避」10.4±6.7点、第5因子「人生における目的意識」15.5±4.9点、第6因子「死への関心」16.6±6.1点、第7因子「寿命観」13.3±5.3点であった。

3. ターミナルケア態度への影響 (表3)

ターミナルケア態度において群間に有意差はみられなかった。しかし、見学前後の推移では、「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」で見学群 (p=0.003) および非見学群 (p=0.020) に差がみられた。また、「II. 患者・家族を中心とするケアの認識」では、非見学群 (p=0.048) に差がみられた。「III. 死の考え方」に有意差はなかった。各項目の平均値±標準偏差は「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」58.0±7.2点、「II. 患者・家族を中心とするケアの認識」は51.3±6.3点、「III. 死の考え方」は36±0.9点であった。

4. 看取り体験と職歴の影響 (表4)

本対象者の属性において、看取り体験と職歴において両群の分布に差がみられた。看取り体験において、2年課程の看護学生のみを対象とした調査で、臨床での看取り体験が死生観・ターミナルケア態度に関わる²⁹⁾ことが報告されている。しかし、経験年数と臨老式死生観尺度との間にはほぼ相関がなく、FATCOD-FormB-Jの間には係数0.2程度の低い相関である³⁰⁾ことが報告されており、本研究の結果に非見学群の看取り体験者の多さが影響しているのではないかと考え、次のように追加分析を行った。

臨老式死生観尺度において、看取り体験なしの者は、見学群の第5因子「人生における目的意識」(p=0.025)のみ得点が有意に高くなった。看取り体験が有りの者は、非見学群において第2因子「死への恐怖・不安」(p=0.045)は低下し、第5因子「人生における目的意識」(p=0.010)の得点が高くなった。FATCOD-FormB-Jにおいて、看

表2 解剖見学・終末期看護学講義前後の見学群・非見学群の臨老式死生観尺度得点の比較

因子	全体 N=62		見学群 n=31				非見学群 n=31				交互作用			主効果 (群間)			主効果 (前/後)		
	M	SD	前		後		前		後		自由度	F値	p値 ^a	自由度	F値	p値 ^a	自由度	F値	p値 ^a
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD									
第1因子. 死後の世界観	20.3	5.6	21.0	4.5	20.3	5.7	19.5	6.6	20.0	6.4	1.0	1.261	0.266	1.0	0.430	0.510	1.0	0.050	0.820
第2因子. 死への恐怖・不安	18.2	6.8	16.8	6.6	15.9	6.0	19.6	6.7	16.1	7.2	1.0	3.220	0.078	1.0	0.919	0.340	1.0	9.480	0.003
第3因子. 解放としての死	16.3	6.0	15.9	6.4	17.1	5.2	16.6	5.7	16.7	6.4	1.0	0.527	0.471	1.0	0.023	0.880	1.0	0.650	0.423
第4因子. 死からの回避	10.4	6.7	9.5	6.5	8.6	6.2	11.2	6.9	10.5	6.7	1.0	0.110	0.742	1.0	1.264	0.265	1.0	2.179	0.145
第5因子. 人生における目的意識	15.5	4.9	16.5	3.9	17.6	4.8	14.5	5.6	15.9	5.4	1.0	0.044	0.835	1.0	2.730	0.104	1.0	5.290	0.025
第6因子. 死への関心	16.6	6.1	17.4	5.9	17.7	5.7	15.8	6.4	16.5	6.7	1.0	0.071	0.791	1.0	0.919	0.342	1.0	0.729	0.397
第7因子. 寿命観	13.3	5.3	14.1	5.2	15.2	3.7	12.6	5.4	13.5	4.8	1.0	0.069	0.794	1.0	1.984	0.164	1.0	4.138	0.046

M : mean, SD : standard deviation, a : Analysis of variance,

表3 解剖見学・終末期看護学講義前後の見学群・非見学群のFATCOD-FormB-J得点の比較

	全体 N=62		見学群 n=31				非見学群 n=31				群間比較		前後比較	
	M	SD	前		後		前		後		p値 ^a	p値 ^a	p値 ^b	p値 ^b
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ	58.0	7.2	58.6	7.0	61.8	7.7	57.5	7.5	59.9	7.6	0.439	0.325	0.003	0.020
II. 患者・家族を中心とするケアの認識	51.3	6.3	51.1	5.1	52.4	4.7	51.4	7.3	53.2	6.4	0.480	0.408	0.102	0.048
III. 死の考え方	3.6	0.9	3.6	0.9	3.7	1.1	3.6	1.0	3.4	1.1	0.910	0.265	0.583	0.619

M : mean, SD : standard deviation, a : Mann-Whitney U test, b : Wilcoxon の符号付順位検定

FATCOD-FormB-J : Frommeltのターミナルケア態度尺度日本語版 (Frommelt attitudes toward care of the dying scale-Form B-J)

取り体験ありの者では、見学群の「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」(p=0.006)が有意に高くなっていた。看取り体験ありの者では、非見学群の「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」(p=0.011)、「II. 患者・家族を中心とするケアの認識」(p=0.043)が有意に高くなっていた。看取り体験なしの者は見学群、非見学群と全ての項目に変化がみられなかった。

考 察

解剖見学の死生観・ターミナルケア態度形成への教育効果

臨老式死生観尺度・FATCOD-FormB-Jにおいて交互作用はなく、両群間に差がなかったことから、解剖見学が死生観・ターミナルケア態度を変化させなかったことが示唆された。その理由には、

以下のことが考えられた。1つ目は、解剖見学の主な学習目標が人体の構造と機能に関する知識を習得することであり、その目標のもと看護を学ぶ学生の情意の教育として、献体をされた方々の生前の思いを鑑みて、倫理観を醸成すること等を目標に追加したためと考えられた。見学群には看護教員が見学実習前に生命の尊さや倫理について教授したが、期待していた情意の学習成果に影響しなかったと考えられた。看護学生の解剖見学において、目的に合った実習時期・期間や何をどのように学ばせるかは重要なことであり、解剖見学において医学系教員との連携等を含め教育方略を検討する必要がある。

2つ目は、本研究の対象者の基本属性において、看取り体験の有無の分布の差が結果に影響したと考えられた。看取り体験の有無によって、死生観

表4 解剖見学・終末期看護学講義前後の見学群・非見学群の看取り体験有無における臨老式死生観尺度とFATCOD-FormB-Jの得点の比較

因子		看取り体験あり n=40					看取り体験なし n=22				
		前		後		p値 ^a	前		後		p値 ^a
		M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
臨老式死生観尺度											
第1因子. 死後の世界観	見学群	21.6	5.2	20.7	5.6	0.700	20.4	3.9	19.9	5.9	0.964
	非見学群	20.6	6.3	21.1	5.8	0.447	15.2	6.5	15.2	7.1	1.000
第2因子. 死への恐怖・不安	見学群	16.9	7.0	15.3	6.4	0.247	16.8	6.5	16.5	5.8	0.803
	非見学群	18.9	7.2	16.2	7.2	0.045	22.7	3.1	15.3	8.0	0.080
第3因子. 解放としての死	見学群	16.1	7.5	17.8	4.8	0.300	15.7	5.6	16.4	5.6	0.504
	非見学群	16.8	5.6	17.8	6.2	0.321	16.2	6.5	12.2	5.5	0.414
第4因子. 死からの回避	見学群	8.1	6.2	7.7	6.5	0.610	10.9	6.8	9.4	6.1	0.181
	非見学群	10.5	6.5	10.2	6.4	0.767	14.0	8.5	12.2	8.4	0.680
第5因子. 人生における目的意識	見学群	17.9	4.0	17.7	5.0	0.858	15.2	3.4	17.6	4.9	0.025
	非見学群	14.2	5.2	16.3	5.2	0.010	15.8	7.4	14.0	5.9	0.336
第6因子. 死への関心	見学群	18.5	6.3	18.6	5.7	1.000	16.4	5.6	16.9	5.7	0.271
	非見学群	16.9	6.1	17.5	6.7	0.408	11.5	5.9	12.5	5.2	0.500
第7因子. 寿命観	見学群	13.3	6.0	14.6	4.6	0.323	14.8	4.4	15.8	2.6	0.752
	非見学群	12.4	5.1	13.3	4.7	0.155	13.7	7.0	14.3	5.5	0.854
FATCOD-FormB-J											
I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ	見学群	60.9	6.4	64.8	6.6	0.006	57.1	6.8	59.9	7.2	0.115
	非見学群	55.9	5.8	58.6	6.7	0.011	60.7	7.6	62.7	7.0	0.463
II. 患者・家族を中心とするケアの認識	見学群	52.1	5.1	53.6	4.6	0.115	50.9	4.5	52.1	3.8	0.551
	非見学群	52.0	6.4	54.0	4.8	0.043	47.3	9.6	48.5	9.9	0.917
III. 死の考え方	見学群	3.5	0.9	3.9	0.9	0.132	3.8	0.9	3.5	1.2	0.473
	非見学群	3.4	0.9	3.6	1.0	0.527	4.0	1.1	2.7	1.5	0.144

M: mean, SD: standard deviation, a: Wilcoxon の符号付順位検定

FATCOD-FormB-J: Frommeltのターミナルケア態度尺度日本語版 (Frommelt attitudes toward care of the dying scale-Form B-J)

と死に対する態度に違いがあった²⁹⁾と報告されている。本研究の臨老式死生観尺度において、看取り体験のない者では見学群の第5因子「人生における目的意識」のみに向上変化がみられたのに対して、看取り体験がある者では非見学群には第2因子「死への恐怖・不安」と第5因子「人生における目的意識」に教育効果がみられた。FATCOD-FormB-Jにおいては、「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」と「II. 患者・家族を中心とするケアの認識」に教育効果がみられていた。このことから、看取り体験があることで、終末期看護学の授業内容と臨床での看取り体験の実際をつなぎ合わせて深く理解ができたためと考えられた。

しかし、看取り体験をした見学群も同様に終末期看護学の授業を受けているが、FATCOD-FormB-Jの「I. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」のみの教育効果にとどまった。このことは解剖見学により「死への恐怖・不安」は増さなかったものの、解剖見学がもたらすネガティブな心理面への影響があったため、変化しなかったと推察された。ネガティブな心理面への影響として、プラスチック製の標本とは異なり、解剖された人体を見学することにより看護学生の死への不安が高まった²⁰⁾ことが報告されている。台湾の先行研究²¹⁾は、女子学生は男子学生よりも解剖見学により死への不安が高くなることや、アイルランドの先行研究²⁰⁾か

らは女子学生の死への恐怖感や不安は解剖見学の9ヶ月後に緩和したと報告している。死への恐怖感や不安への影響は、見学群の特性のうち性別が関わっていると推察された。今回の対象者は全員が女性であり、評価の時期は解剖見学の5ヶ月後であった。そのため、ネガティブな心理面への影響が緩和していない状態で測定をしたことで尺度得点の変化が乏しかったと考えられる。死の心理を扱った先行研究¹³⁾において、1980年代後半までの死に関する否定的な考え方から、1990年代には死をポジティブな面で捉えることへのシフトが始まった。2000年に発表された臨老式死生観尺度においても死生観は多次元的、包括的でポジティブに捉えることを試みている¹³⁾。今回、看取り体験のない看護学生が「人生における目的意識」を高めたことは、死生観のポジティブな一側面を向上させたと考える。このことは、解剖見学が看取りを体験する前の段階での看護学生への死生観を育成する一助と考える。今後は、看護学生の解剖見学によるネガティブな心理面も否定することなく、受けた影響を看護に活かすことができる教育方略や、教育効果の評価の検証のあり方についてさらに検討していく必要性が明らかとなった。

3つ目は、本研究の対象者の両尺度の平均値がもともと高かったため、変化が生じにくかったと考えられた。2年課程の看護学生を対象とした尺度得点を比較できる先行研究は、複数の文献検索データベースを用いて検索し、臨老式死生観尺度については1編、FATCOD-FormB-Jについては見当たらなかった。その中で、第1-3因子は含まれていない臨老式死生観尺度の研究結果での第4-7因子の平均値³¹⁾と比較して本研究の方が4.7点高かった。この先行研究の平均年齢は27.5歳であり、看取り体験ありが7割であった。両研究の平均年齢、看取り体験は同等であり、本研究の看護学生は、臨老式死生観尺度の得点がすでに高く、変化しにくかったと考えられた。

2. 研究成果の教育への適応

解剖見学を導入している2年課程および3年課程の看護師養成所の学生については先行研究が見当たらなかったが、2017年度の全国の看護系大学の調査では28.0%が導入しており³²⁾、約3校に1校の大学が看護基礎教育において教育プログラムとして解剖見学を位置づけている。解剖見学は人体の構造と機能や、人体模型での学びとは異なり、献体された方々と向き合うことを通して情意の教育効果が得られる貴重な教育方法であると示唆さ

れている³³⁾。一方で、解剖見学後に看護学生が恐怖心や不安をもつことが報告²⁰⁾されており、本研究結果においても恐怖心が教育効果を抑制したことが示唆されたため、解剖見学において恐怖心等に対する教育上の工夫が必要である。本研究では、解剖見学群において「死への恐怖・不安」は変化しなかった。理由の一つに、解剖見学による不安を軽減するために、解剖見学後にグループ内で看護学生が自由に語る等の機会を設けたためと考えられた。なお、2年課程は准看護師として看取り体験をもつ看護学生が含まれている。看取り体験は終末期看護学の教育効果につながっていたと推察されたことから、准看護師として実践の中で培われた看取りの経験知を活かし、看取り体験のない看護学生もいるため、それぞれに応じた教育方略を考える必要がある。

研究の限界と課題

今回の調査は、対象者は自分がどちらの群かを認識していないが、教育効果の評価に関する調査に協力していることは知っていたため、結果に影響している可能性がある。また、研究協力校の選定を無作為に行えず、2つの集団の同質性には差があり、調査期間や対象者の関心等が関与していることも考えられ厳密な比較はできず、一般化に限界がある。FATCOD-FormB-Jの下位尺度「Ⅲ. 死の考え方は、通常は使用することを推奨されていない。今回、死生観の観点から捉えるために調査を行ったが、設問項目が1つであり変化をみることに限界があった。死生観の形成やターミナルケア態度を促進するための看護基礎教育における方略をさらに探究していくことも課題としてあると考える。

結 論

看護師養成所2年課程（定時制）の学生の解剖見学が死生観とターミナルケア態度に及ぼす変化を臨老式死生観尺度とFATCOD-FormB-Jを用いて見学群と非見学群の比較を通して検討したところ、次のことが明らかとなった。

臨老式死生観尺度、FATCOD-FormB-Jにおいて交互作用はなく、両群間に差がなかったことから、解剖見学が死生観・ターミナルケア態度形成を変化させることがなかったと示唆された。しかし、解剖見学と終末期看護学の授業によって前後での変化はあり、臨老式死生観尺度においては、第2因子「死への恐怖・不安」は減、第5因子「人

生における目的意識」は増、第7因子「寿命観」は増と変化がみられた。FATCOD-FormB-Jにおいては、「Ⅰ. 死にゆく患者へのケアの前向きさ」は両群ともに増、「Ⅱ. 患者・家族を中心とするケアの認識」は非見学群のみに増と変化がみられた。

解剖見学により臨老式死生観尺度・FATCOD-FormB-Jが変化しなかった理由の一つに、本研究の対象者の基本属性において、非見学群には看取り体験者が多く、看取り体験の有無が結果に影響していることが考えられた。看取り体験が結果に影響したと示唆され、検証のあり方や教育の方略について検討する必要性が明らかとなった。

謝 辞

本研究を進めるにあたりご協力をいただいた教務部長、専任教員の皆様、データ収集にご協力いただきました看護学生の皆様、ならびに統計解析にご助言をいただきました先生方に心より感謝いたします。また、医療の発展を願い生前に献体の意思を表明していただきました故人に深謝いたします。

利益相反

本研究において利益相反は該当しない。

文 献

- 1) 内閣府：令和3年版高齢社会白書（全体版）第1章 高齢化の状況，[オンライン，https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/html/zenbun/sl_1_1.html]，内閣府，1. 7. 2022
- 2) 池口佳子，高田幸江：ターミナル期にある患者のその人らしさを支える看護を実践するための教育的試み 看護過程を用いた問題解決思考から，リフレクションへ，聖路加国際大学紀要，2，37-41，2016
- 3) 岡本双美子，石井京子：看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析，日本看護研究学会雑誌，28(4)，2005
- 4) 山本俊一：死生学のすすめ，医学書院，29，東京，1992
- 5) 河野博臣：死の不安への援助，臨床看護，14(6)，812-816，1988
- 6) 岩永麻衣子：終末期患者に関わる看護師の看取り体験に関する文献レビュー，自治医科大学看護学ジャーナル，13，40-41，2015

- 7) 古屋洋子，小野興子，横山宏：看護学生の死生観，山梨県立看護大学短期大学部紀要，9(1)，115-129，2004
- 8) 簀武恭兵，豊里竹彦，眞榮城千夏子，他：病院看護師の死生観とターミナルケア態度との関連について，琉球医学会誌，37(1-4)，5-12，2018
- 9) 三木喜美子，佐野宏一郎，乙黒仁美，他：看護基礎教育における解剖見学実習のあり方についての検討-解剖見学実習に関する文献から見る今日の動向から-，健康科学大学紀要，15，79-83，2019
- 10) 落合清子，長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化 読書による死生観確立への影響について，聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要，(27)，7-13，2005
- 11) 石田順子，石田和子，神田清子：看護学生の死生観に関する研究，桐生短期大学紀要，18，109-115，2007
- 12) 石川美智，阿部千賀子，大曲純子：エンゼルケアシミュレーション演習前後の看護学生のターミナルケア態度・共感性の比較，ホスピスケアと在宅ケア，28(2)，148-155，2020
- 13) 海老根理絵：死生観に関する研究の外観と展望，東京大学大学院教育学研究科紀要，48，193-202，2008
- 14) 熊谷晶子，竹村眞理，山下麻実，他：看護基礎教育における解剖見学実習の教育効果（その1），横浜創英短期大学紀要，5，73-79，2009
- 15) 古屋敷明美，田村典子，石野レイ子，他：看護学科における解剖遺体見学実習の意義 実習後の感想文の分析から，広島県立保健福祉短期大学紀要，5(1)，25-33，2000
- 16) 山崎裕二：看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(1) 「死に関する看護・医療系学生の意識調査」の授業への導入，日本赤十字武蔵野短期大学紀要，15，89-96，2002
- 17) 福島眞里，菅原美保，後藤理香，他：解剖見学実習の事前学習における人体標本見学実習の教育効果，日本医療大学紀要，6，135-143，2020
- 18) 清水容子，蓮池光人，外村昌子，他：本学看護学科における解剖見学実習による学生の学びと今後の課題 解剖見学実習後のレポートの内容分析から，森ノ宮医療大学紀要，11，111-126，2017
- 19) 菅原千恵子：看護学生の「死生観」と「死生

- 観の育成」についての文献検討, 臨床死生学, 22(1), 122-130, 2017
- 20) Mc Garvey A, Hickey A, Conroy R : The anatomy room : A positive learning experience for nursing students, Nurse Education Today, 35(1), 245-250, 2015
- 21) Lai HL, Lee YF, Lai KC : The influence of humanized anatomical pedagogy on psychophysiological responses and academic achievement in nursing students, Journal of Professional Nursing, 36(4), 245-250, 2020
- 22) 文部科学省 : 看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインについて, 参考資料 5, [オンライン, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gijiroku/_icsFiles/afldfile/2016/11/15/1379378_04.pdf], 文部科学省, 11. 1. 2021
- 23) 平野裕子, 林文, 白土辰子, 他 : 基礎教育における死後の処置教育と死後の処置を教える教員の終末期ケアおよび死に対する態度, 死の臨床, 36(1), 169-174, 2013
- 24) 岩間淳子, 松本佳子 : 看護学科における動物解剖と人体解剖見学の意義, 川崎市立看護短期大学紀要, 18(1), 11-19, 2013
- 25) Albarracin D, Johnson BT, Zanna MP : The Handbook of Attitudes, Psychology Press, United States of America, 2005
- 26) 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志, 他 : 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証, 死の臨床, 23(1), 71-76, 2000
- 27) Frommelt, K. M. : The effects of death education on nurses attitudes toward caring for terminally ill persons and their families. Am. Journal of Hospice and Palliative Care, 8 (5), 37-43, 1991
- 28) 中井裕子, 宮下光令, 笹原朋代, 他 : Frommelt のターミナルケア態度尺度日本語版 (FATCOD-B-J) の因子構造と信頼性の検討 尺度翻訳から一般病院での看護師調査 短縮版の作成まで, がん看護, 11(6), 723-729, 2006
- 29) 加藤麻未 : 2年課程看護師養成学校における看護学生の自己受容に関する研究 死生観との関係から, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, (33), 53-60, 2008
- 30) 後藤真澄, 三上章允, 間瀬敬子, 他 : 高齢者終末期ケアに携わる関係職種の死生観と看取り観について, 厚生学の指標, 61(15), 28-34, 2014
- 31) 中村登志子, 山下理恵子, 高山直子, 他 : 准看護師看護学生の死生観に関連する要因について, 日本健康医学会雑誌, 20(3), 166-167, 2011
- 32) 向井加奈恵, 山口豪, 大島千佳, 他 : 看護系大学における解剖生理学教育の実態調査, 形態・機能, 16(1), 8-18, 2017
- 33) 高木知道 : 医学教育と生命倫理 解剖実習について, 生命倫理, 6 (1), 89-93, 1996